

思い出す人々



西山 厚 全24回

第3回 【母】

母が大病をしたのは私が三歳の時だった。

母が入院した日のことはよく覚えている。母は私をおんぶして家の中をぐるぐる回り、「退院して戻ってきたらまたおんぶするわね」と言っただけで家を出て行った。大手術、母は助かった。しかし、再発したら終わりだと言われていた。母は小さな観音像を持って嫁いできた。夜、寝る前、母は、観音様の前で、般若心経と観音経を唱えていた。

生活に追われる日々の中でやめてしまっていたお茶とお花の習い事を再開したのは、少しでも気が晴れるようにという父の勧めによるもので、その頃から母は俳句も作り始めた。

それから十数年が過ぎて、大学生の兄が母の句集を作ることを思い立ち、高校生の私も手伝うことになった。手書き、手作り、挿絵も入った、世界に一冊だけの母の句集。名は『母子草』。句誌「松苗」に掲載された二百十五句を年代順にすべて収めている。

紅さえてふれて見たさの寒椿

ここに母がいる。